

39 平成 27 年度に当院言語新患外来を受診した中高生吃音の傾向

病院リハビリテーション部言語聴覚療法¹、病院耳鼻咽喉科²、学院言語聴覚学科³、研究所⁴
北條具仁¹、石川浩太郎²、角田航平¹、坂田善政^{3, 1}、酒井奈緒美^{4, 1}

【はじめに】中高生の吃音は治療ニーズが高いにも関わらず教育・医療のいずれの機関にも相談したくともできない現状が報告されている（小林 2004, 長澤 2006）。吃音治療に対する制度として、教育機関では整備が始まったばかりであり、学校生活の多忙さから医療機関への受診の機会も限られている。今回、平成 27 年 4 月から 28 年 3 月までの言語新患外来を受診した中高生吃音者の初診時の状態を検討し、中高生吃音に対応する際の今後の課題について検討したので報告する。

【方法】平成 27 年 4 月から平成 28 年 3 月までの 1 年間に吃音を主訴に言語新患外来を新規に受診し中高生吃音者延べ 18 名を対象に、吃音検査法と心理態度面の両方を精査できたものは 13 名であった。この 13 名を学年、性別、受診理由、初診時の対応（評価及び結果説明のみ、評価及び訓練、評価及び居住地近くの施設へ紹介、その他）の違いを示した。また、発話症状、心理態度面について、分析し、その傾向を整理した。

【結果】1. 受診時学年：受診した学年に偏りは見られなかった。2. 性別：男性 9 名、女性 4 名であった。3. 受診理由：親の勧め 6 名、自分から受診を希望 7 名であった。4. 初診時の対応：評価のみで終了したのは 3 名で、全員親の勧めで受診した者であった。他は集中訓練 2 名、月 1 回訓練 3 名、長期休み毎訓練 4 名、他院紹介 1 名であった。5. 発話症状：単語・文の音読における吃音中核症状頻度について、男女別、受診理由別、心理・態度面別に t 検定を用いて比較したが、有意な差は認められなかった。6. 心理・態度面：男女別、受診理由別、発話症状別に t 検定を用いて比較したところ、受診理由別において心理・態度面の「吃音の悩みに関する質問紙」の成績に有意な差が認められ、自分から受診を希望した群の吃音に対する悩みの深さが示された。

【考察】1) 今回の結果からは学年の違いや男女差による受診理由、発話症状、心理・態度面の差は認めなかった。学年や男女の違いによって受診数に差が出る予測とは反したが、母数の少なさを反映している可能性があり、症例数を重ねて検討する必要があると考えられた。2) 自分から受診を希望し群は有意に心理・態度面で悪化を認め、評価のみで終了する割合が低かった。受診理由は、心理・態度面の大まかな状態と、訓練の方向性・頻度が示唆する重要なチェック項目であることが示唆された。一方、親の勧めで受診した群の半数は何らかの訓練を希望しており、親の勧めを契機に治療動機が固まる事例もあると考えられた。今後は症例数を増やし、今回得られた傾向が確かなものであるかを検討していく必要がある。